

國學院大學學術情報リポジトリ

Utsutsu niwa mashite hitome o tsutsumu koto no shiraruru nari : On the interpretation of a binding particle “ya” and an auxiliary verb “ramu” on Poem Number 559 in Kokin Wakashu, Collection of Old and New Japanese Poems

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000959

「うつゝにはまして人めをつゝむことのしらるゝなり」
——『古今和歌集』五五九番歌の係助詞「や」と
助動詞「らむ」との解釈について——

色川 大輔

キーワード：疑問副詞句、係助詞「や」、助動詞「らむ」、

『古今余材抄』、『古今集遠鏡』

一、はじめに

桑原博史監修『新明解 古典シリーズ 1 万葉集・古今集・新古今集』（三省堂、平成二年九月。担当執筆者は宮地幸子・島原信義・田辺俊一郎）という学習参考書がある。先日書店の店頭で見かけ、一冊本の詞華集としては廉価で注釈も行き届いており三大集の抜萃を読むに上乘のものと思ひ、求め眺めていたところ、『古今和歌集』五五九番歌とその解説が目にとまった。

住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よぐらむ（二五八頁）

（住の江の岸に寄る波）（昼間、まことに通う道ならばともかく）夜までも、夢のうちの通う道で、どうして（あなたは）人目をはばかって避けているのであろうか。（二五八頁。傍線は引用者）

夜までも。「や」は疑問の係助詞。（二五九頁）

「らむ」は、現在に関する推量の助動詞。上に「なぜ」というような語を補って解する。（二六〇頁。傍線は引用者）

一部引用に傍線を付したが、和歌本文中には該当する語

の無い「どうして」という副詞句が使用してある。お研究者様お学者様がどう思つか知らないが、筆者は、この訳出法を見て、『古今和歌集』八四番歌の伝統的な解法を想起した。同文献より記事を以下に引く。

⑮久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ（二一〇頁）

⑯（久方の）日の光がこんなにのどかな春の日に、どうしてこんなに落ち着いた心もなく花が散っているのがあるうか。（二一〇頁。傍線は引用者）

⑰花の散るらむ ふつうには、上に「なぜ」というような語を補って解すべきところとされている。「らむ」は現在に関する推量の助動詞で、①目に見えないものについて、「…しているだろう」と推量する場合、②ある事柄を見聞きして、そのかげにある原因・理由などを「…しているのだろう」と推量する場合とがある。ここでは②。「どうして落ちついた心もなく花が散っているのだろう」、の意。（二一一頁。「上に」以下の傍線は引用者）

手法としては、文中に無い原因・理由の疑問を表す副詞

相当の語「なぜ」を補って解するという同一の手法を探っている。この解法それ自体は、八四番歌やその類歌について、『春樹頭秘抄』や『春樹頭秘増抄』といった中世末近世初期のてにをは秘伝書類以来行われ、現在も承認、継承されているものである。

しかし、筆者が不思議に思ったのは、五五九番歌には八四番歌には無い係助詞「や」の存在があり、施注者自身も上掲のとおりその存在に言及していることである。

管見の限りでは、係助詞「や」の用いられた和歌について、このように疑問副詞句を補って解釈する解法の採用を議論したものを見た覚えがない。

疑問の係助詞「や」があれば、助動詞「らむ」の推量・疑いの焦点も明示されていることになり、何も殊更に疑問副詞を補う必要も無からうと考えるのであるが、何故このような解法が取られるのであろうか、現代日本ではこの疑問副詞句を補う解法はいかなる運用をなされているのであろうかという疑問に達した。本稿はこの疑問を辿ってみたものである。

二、現代日本の注釈書類における解

- ここでは、右の『古今和歌集』五五九番歌について、現代日本における解法の傾向を、注釈書類を通じて見ていく。
- 『古今和歌集』五五九番歌は『小倉百人一首』の一八番目の収載歌でもあるので、『小倉百人一首』の注釈書・解説書類も対象にした。仰々しい節の題だが管見に及んだところの注釈書類は、刊行年順に排列すると、下記のとおりやさやかなものである。本稿では以下、各注釈書類については頭書の算用数字で呼称する。
- 1、佐伯梅友校注『日本古典文学大系 8 古今和歌集』(岩波書店、昭和三三年三月)
 - 2、小沢正夫校注・訳『日本古典文学全集 7 古今和歌集』(小学館、昭和四六年四月)
 - 3、窪田空穂訳『古今和歌集』(久松潜一他責任編集・窪田空穂他訳『現代語訳 日本の古典10 古今和歌集他』〈河出書房新社、昭和四七年一月〉)
 - 4、奥村恒哉校注『新潮日本古典集成 古今和歌集』(新潮社、昭和五三年七月)
 - 5、佐伯梅友校注『古今和歌集』(岩波書店、昭和五六年一月)
 - 6、小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系5 古今和歌集』(岩波書店、平成元年二月)
 - 7、小沢正夫・松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』(小学館、平成六年一月)
 - 8、片桐洋一『古今和歌集全評釈(中) —全三巻—』(講談社、平成一〇年二月)
 - 9、島津忠夫訳注『新版 百人一首』(KADOKAWA、平成一一年一月新版)
 - 10、片桐洋一『原文&現代語訳シリーズ 古今和歌集』(笠間書院、平成一七年九月)
 - 11、高田祐彦訳注『新版 古今和歌集 現代語訳付き』(KADOKAWA、平成二一年六月)
 - 12、谷知子編『ピギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首(全)』(KADOKAWA、平成二二年一月)
 - 13、吉海直人監修『世界でいちばん素敵な百人一首の教室』(三オブックス、令和元年一〇月)
 - 14、マール社編集部編『カラー文庫 百人一首』(マール

社、令和元年一月)

なお、西下経一校註『日本古典全書 古今和歌集』(朝日新聞社、昭和二十三年九月)についても確認することは得たが、施注事項に助動詞「らむ」に関わる記述が無かったので、以下の分析には含まない。

8と10とは同一著者の手にかかるもので10の方が刊行年が後発のものであるが、

本書『古今和歌集』は「全対訳 日本古典新書」として一九八〇年に創英社から刊行されましたが、これを全面的に改訂を施して、公刊したものです。(二頁)と注記があるので、10から8に解釈が展開したものと考えられる。

また、今回は筆者が案内に暗い学習参考書類における記事も少し集めてみた。ここには冒頭に示した桑原博史監修『新明解 古典シリーズ 1 万葉集・古今集・新古今集』も含む。管見に及んだものは下記のとおり。

15、 桑原博史監修『新明解 古典シリーズ 1 万葉集・古今集・新古今集』(三省堂、平成二年九月。担当執筆者は宮地幸子・島原信義・田辺俊一郎)

16、 山田繁雄著・渡辺福男画『イラスト学習古典 百人一首』(三省堂、平成五年一月)

17、 青木五郎他監修『クリアカラー国語便覧』(数研出版、平成二四年一月第四版)

18、 鈴木日出男他『シグマベスト 原色百人一首』(文英堂、平成二六年二月)

19、 糸井通浩・中西久幸『風呂で覚える百人一首』(改訂版)』(教学社、平成二七年五月)

20、 足立直子他監修『プレミアムカラー国語便覧』(数研出版、平成二九年一月)

21、 上原雅志『三十一文字で古文を攻略! 和歌で身につく古典文法』(駿台文庫、平成三〇年八月)

山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』(明治書院、平成一三年三月)によると、助動詞「らむ」の用法を、以下の三種に分けられる。

① 現在推量。現在起こっていて、話し手が確認していない事柄やその状態を推量・想像する。(八四〇頁)

② 原因推量。現在起こっていて話し手が確認している事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

る事柄について、その原因や理由がどんなことである

かを推量・想像する意を表す。(八四〇頁)

③原因推究。現在起こって話し手が確認している事柄について、どうしてそうなのか、なぜそうなのかと、その原因・理由・手段などを推究する意を表す。

(八四一頁)

調査した文献の通釈類の解釈を、右の三種に分類したものを、以下に示す。同一文献の内部で、訳と注釈との間などで分かれているものもあることを断っておく。

① 現在推量(九文献)

1、昼は止むを得ないにしても、夜までも、…あの人が人目を避けているのだろうか。(二二四頁)

2、住江^{すみのえ}の岸には波が寄る。まさにその夜の夢の中の通り道でさえ、あなたは人目を避けようとなさるのか。

2、人目(第三者の目)を避けているのだろうか。(二三八頁頭注。7の頭注も同文)

3、住江の岸に寄る波の、その寄るにゆかりある夜までも、夢はその通り路で、人目を避けて、思う人の所まででは行き着けないのであろうか。(八五頁)

4、住の江の岸に寄る波、その夜^よの中で往き来する時まで

も、あなたは人目を避けて、私と逢っては下さらないのであろうか。(二〇二頁)

5、人目の心配のない夜の夢の中の通路でまで、あの人は人目を避けているのだろうか。(二二九頁)

7、住江^{すみのえ}の岸に波が寄るまさにその夜の夢の中の通り路でさえ、あなたは人目を避けて私と逢おうとしないであろう。(二二三頁)

10、住の江の岸に寄せる波…夜さえ、夢の通り路で人目を避けて、私と逢ってくださらないのであろうか。(二三四頁)

11、住の江の岸に寄る波、昼だけでなく夜までも、夢の通り路で人目を避けるのでしょうか。(二六五頁)

12、住の江の岸には波が寄るといふのに、その「寄る」ならぬ「夜」までも、夢の通り路での人目を避けて、私に逢^あってくれないのだろうか。(五二頁)

② 原因推量(二文献)

2、歌謡的なリズムに乗った歌であるが、恋人を夢に見られないことを、相手が人目を避けているためかといったのは技巧的である。(二三八頁)

7、恋人を夢に見られないことを、相手が人目を避けていたためかといったのは技巧的である。(二二三頁)

③ 原因推究(五文獻)

6、住の江の岸に寄つて来る波のようになびき寄るこの夜までも、どうして夢の中の通り路で人目を避けていらっしやるのだろうか。(二七六頁。傍線は引用者)

8、住の江の岸に寄る浪のように絶えることなく通つていらっしやるあなたは、夢の通り路においてさえ、どうして人目を避けるのでありましようか。(四三二頁・四三七頁。傍線は引用者)

8、「よくらむ」の「らむ」は原因推究の意の「らむ」で、「どうして夜の夢においてまで人目を避けるのだろうか」といぶかつてみせる表現である。(四三七頁。傍線は引用者)

9、住の江の岸による波ではないが、人目の憚られる昼ばかりでなく、夜までも、その夢の中の通り路で、あなたはどうして人目を避けようとなさるのだろうか。(四八頁。傍線は引用者)

13、住の江の海岸に波が打ち寄せるように、夜に見る夢の

中でさえ、どうしてあなたは人目を避けて、会いにきてくれないの。(三五頁。傍線は引用者)

14、住の江の岸に打ち寄せる波のように、あなたに寄りたいと願っているのに、この頃は夜の夢の中にも恋人は現れてくれません。夢の中の通り路でさえ人目を避けようとするのはなぜでしょうか。(二七頁。傍線は引用者)

これに対して、筆者の見た学習参考書類においては、原因推量と原因推究との二種に分かれはするもの、おおむね原因推究が優勢のようである。

② 原因推量(一文獻)

18、住の江の岸に寄る波のよ、ではないが、夜でも夢の通り路を通つて逢えないのは、あの人が夢の中でも人目を避けているからであろうか。(三八頁)

③ 原因推究(六文獻)

15、(住の江の岸に寄る波)(昼間、まことに通う道ならばともかく)夜までも、夢のうちの通う道で、どうして(あなたは)人目をはばかって避けているのであろうか。(二五八頁。傍線は引用者)

16、住の江の岸に寄る波の、その「よる」ではないが、昼

ならともかく、夜までも、夢の中で思う人のもとに通っていく道で、私は、どうして人目を避けているのだろうか。(三三頁。傍線は引用者)

17、住の江の岸にうち寄せる波の「よる」ではないが、なぜ夜の夢の中でもあなたは人目を避けるのだろうか。(逢ってくれないのか。)(八五頁。傍線は引用者)

19、住の江の岸に波が「寄る」という言葉に言寄せて、「夜」には寄り添えるかもしれないと思う。しかしその夜までも、人目を憚る必要もない夢の通い路なのに、どうしてあなたは人目を避けているのだろうか。(二五頁。傍線は引用者)

20、住の江の岸にうち寄せる波の「よる」ではないが、なぜ夜の夢の中でもあなたは人目を避けるのだろうか。(一〇五頁。傍線は引用者)

21、住之江の岸に寄る波ではないが、夜までも、夢の通い路を、あの人はどうして人目を避けて通って来ないのだろう。(五二頁。傍点ママ。傍線は引用者)

夢の中でも恋人が現れないことについての原因・理由を推量しているというのが、学校参考書類では共通した解釈

のようである。

「人目よぐ」を夢に現れないことの原因・理由とするのか、「よるさへや夢の通い路人目よぐ」全体を推量対象外の事実として、その事実の原因・理由を疑う表現であると考えられるのかという点に対立がある。

そして、以上から見えるのは、この歌が係助詞「や」による焦点化を持っているのにも関わらず、疑問副詞句を補う解釈がかなりの程度容認されているという現実である。

三、「どうして」——その生成の理路について——

『古今和歌集』八四番歌に用いられた類の助動詞「らむ」について文中に焦点を求める解釈説は現在否定されている。野村剛史「三代集ラムの構文法」(川端善明・仁田義雄『日本語文法 体系と方法』(ひつじ書房、一九九七年一月)所収)によれば、以下のように説明される。

古今八四歌のような場合に、「しづ心なく」など文の一部に推量が向けられているという説がある。しかし古代語では、文の焦点的部分は原則として係り結びによって示されるのであり(係り結びが焦点設定の必要

条件となる)、この歌に関しては部分推量のような説
はやはり無理であろう。句が連体止めになっている理
由も説明できない。そもそもこの種のラムをラムの本
質的性格から説明しようとするとしても無理が生
ずる。(一九一頁)

それでは、『古今和歌集』五五九番歌については、「文の
焦点的部分」は係助詞「や」によって明示されているにも
関わらず、どのような理路によって、疑問副詞句を補う解
釈が成立しうるのかということ、ここで検討してみる。

疑問副詞句を補う解釈は、「原因推究」と称されることが
あるが、この用法についての通用の解説は、先に引いた山
口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』(明治書院、平成
一三年三月)を例に引くと、以下のようなものになる。

本居宣長『古今集遠鏡』が「日ノ光ノノドカナル
リトシタ春ノ日ヂヤニ、ドウ云事デ花ハ此ヤウニサ
ワワくト心ゼワシウチルコトヤラ」と訳し、富士谷
成章『脚結抄』が「春の日に」と「しづ心なく」との
間に「ナド」を補って示すなど、疑問詞を補って解す
ることは、江戸時代から行われていた。(八四一頁)

一つの表現に二つの意味を持たせ、持たせられた二
つめの意味と他のどこかの部分との矛盾対立を作り出
すというのが、これらの歌に共通する表現である。そ
のようにして作り出された矛盾対立について、疑問詞
を補って疑問点として示すか、矛盾対立を矛盾対立と
して推量的に表現したとするかが、論の分かれめと
なってくる。(八四一頁・八四二頁。秋本守英執筆部
分)

五五七番歌の矛盾対立について、先の注釈書類が説明し
ているので、以下に掲げておく。

夜までも。裏に「昼はいうまでもなく」の意が隠さ
れている。(2。一三八頁)

夜までも。裏に「昼はいうまでもなく」の意が隠さ
れている。(7。一三三頁)

夕闇の頃に男は女のもとに人目を気にしながら通つ
てゆくものだが、夕闇の頃ではなく、夜になってまで、
しかも夢の中においてさえ、人目を気にするのは何故
なのか、困ったものだと言っているのである。(8。
四三七頁)

「さへ」は添加の意の副助詞。「や」は疑問の係助詞。夜までも。(9。四八頁)

「さへ」は、添加てんか。昼の間はもちろん、夜までもの意。(16。三七頁)

「さへ」は添加の副助詞で、昼間はもちろん、夜までも、の意。(18。三八頁)

つまるところ、「昼」や「夕闇」など、「夜」よりも浅い時間帯が副助詞「さへ」によって示唆されることになる。このことの指摘は、管見では契沖の指摘にまで遡るようであり、これらの注はその指摘を踏まえたものと見られる。

契沖『古今余材抄』(久松潜一他校訂『契沖全集 第八卷』〈岩波書店、昭和四八年三月〉)の指摘は以下のものである。契沖『百人一首改観抄』(久松潜一他校訂『契沖全集 第九卷』〈岩波書店、昭和四九年四月〉)にも同文の指摘がある。

〈よる〉さへといへるにて、うつゝにはまして人めをつゝむことのしらるゝなり。(三七五頁)

ここから、「うつゝ」と「夢」との間に「矛盾対立」を作り出すことにより、「原因推究」の解釈が可能になるのであろうと考えられる。

こう考えると疑問副詞句を用いただけでなく、文中に矛盾となる「うつゝ」にまつわることをも置かず、副助詞「さへ」だけで矛盾を作り出すこの五五九番歌は、凄まじい技巧を駆使したもので、歌人の技巧の極致を示したもののように、筆者に感じられる。

野村氏は「春の色のいたりいたらぬ里はあらし咲ける咲かざる花の見ゆらむ」(二〇五頁)などの型について、

いささか無理のあるしかしコンパクトな、古今的時代の和歌において特に好まれた表現であるとともに、「何(か)：ラム」と並び立つことによってそれとはやや異なる独自の表現価を身に付けてゆくことにもなる。それがしばしば指摘される「：とは。」「：なんて。」の如き解釈ということになるが、「：とは」「：とは」は「：とは、どういうことだ。」の如きであり、本来原因推量であるとともに、丁度そこから「何か〓〓どういうことだ」を差し引いた如くでもある。より派生的な表現ということになるのである。(二〇九頁)

と評しているが、矛盾の前項を副助詞「さへ」だけで言外に表現してしまう五五九番歌の「コンパクト」さは、序詞

まで盛ってしまうその表現への食欲さも含め、瞠目すべきものがあるように感じる。

四、係助詞「や」について

もう一つ問題になるのが係助詞「や」の担うはずの疑問がどこに行ってしまったのかという疑問であるが、このことについては、2と7が、『古今和歌集』五五二番歌と絡めて、

「や」は五五二の「や」と同様だが、このほうが相手を問いつめる意が強い。(2。二三八頁)

「や」は第三句の終りに移して訳すことができるが、感動を表わす「よ」に近い。(2。二三六頁)

「や」は五五二の「や」と同様だが、このほうが相手を問い詰める意が強い。(7。二二三頁)

この「や」は感動を表す「よ」に近い。(7。二二二頁)

間投助詞のような性格を指摘している。それでよいというつもりも無いが、疑問よりも付加している副助詞「さへ」に対する焦点化が主たる役割となったと考えれば、焦点化

によって、副助詞「さへ」の持つ添加の意を強調し、言外の「うつゝ」との矛盾を焦点化し、「原因推究」の醸成を助けたものという説明も成り立つであろう。普通の疑いの係助詞として見た解釈とは思われないので、説明を付けるにはこのような操作が必要なのではないか。

なお、この「原因推究」的な解釈は本居宣長『古今集遠鏡』が既に行っている解釈であることを報告しておく。

昼ホンマニ通フ道デハ人目ヲハハカルモソノハズノ事

ヂヤガ [一]夜夢ニ通フト見ル道デマデ人目ヲハハカ

ツテヨケルヤウニ見ルノハ ドウシタコトヂヤヤラ

(大久保正編『本居宣長全集 第三卷』〈筑摩書房、昭

和四年一月〉一五八頁。二重傍線は引用者)

『古今集遠鏡』の例言では、「らんの訳ツは、くさぐさあり」(九頁)として様々な訳出方法が説明されている。

助動詞「らむ」を「ヤラ」と訳するのは、

いつの人まにうつろひぬらんなどは、イツノヒマニ散

テシマウタ事ヤラと訳す、ヤラらんにあたり、(九

頁・一〇頁)

と見え、係助詞「や」と助動詞「らむ」とを合わせて「ヤ

ラ」とすることも、同じく

玉かづら今はたゆとや吹風の音にも人のきこえざるら
んなどのたぐひも、同じく上へうつして、やと合せて、
ヤラと訳して、下句をば、一向二オトツレモセヌと、
落しつけてとぢむ、これらはらんとうたがへる事は、
上にありて、下にはあらざればなり、(一〇頁)

「ドウシタコトヂヤ」は、「原因推究」として醸成されて
補われた疑問副詞句を表現したと見るに足りるものである
う。

五、『古今集遠鏡』の訳における係助詞「や」

ただし、『古今集遠鏡』の五五九番歌についての解は、疑
問副詞句を補う解釈を取っている八四番歌に対する以下の
解と、若干異なる点がある。

日ノ光^ッノノドカナユルリトシタ春ノ日ヂヤニ ドウ云
事デ花ハ此ヤウニ サワくト心ゼワシウチルコトヤ
ラ (五一頁)

八四番歌の訳を見れば一目瞭然だが、五五九番歌の訳には、

八四番歌の訳にある傍線が無いのである。

例言は傍線について次のように説明する。

又かたへに長くも短くも、筋を引たるは、歌にはなき

詞なるを、そへていへる所のしるしなり、(一二頁)

八四番歌の「ドウ云事デ」はこちらが該当すると考える。

同じく例言中に

上にや何などいふ、うたがひことばなくて、らんと結

びたるには、ドウイフ事デといふ詞をそへてうつすも

多し、(二〇頁)

とあることと合わせて有名な箇所と思う。

しかし、五五九番歌については、「うつゝにはまして」相

当の部分以外に傍線が無く、「ドウシタコトヂヤ」は文中の

何らかの語を訳したものであると考えられる。

疑問副詞句を用いた文の助動詞「らむ」の訳に「ヤラ」

を充てたものとしては、先に示したとおり

いつの人まにうつるひぬらんなどは、イツノヒマニ散

テシマウタ事ヤラと訳す、ヤラらんにあたり、(九

頁・一〇頁)

という記事がある。こうして考えていくと、五五九番歌の

訳文については、「ヤラ」を「らむ」に充て、「ドウシタコトヂヤ」は他の何らかの語を訳したものと見える。

このように考えた時には、「ドウシタコトヂヤ」に係助詞「や」を充てることになる。他に疑問の概念を表す語が文中に無いからである。

係助詞「や」の訳出法について、『古今集遠鏡』例言は以下のように解説していることもあり、係助詞「や」の疑問の意に「ドウシタコトヂヤ」という疑問副詞句が何故充てられるのかという疑問が残る。

疑ひのやもじは、俗語には皆、カといふ、語のつゞきたるなからにあるは、そのはてへうつしていふ、「春やとき花やおそきとは、春が早イノカ花ガオソイノカと訳すがごとし、(九頁。合点を鉤括弧で示した)

しかし、他にそれと言うべき対象が見えないことから、このように考えておく。副助詞「さへ」を焦点化する係助詞「や」の機能をこのように表現したのかもしれない。

六、「どうして」別解——続係助詞「や」について——

前節で大団円として本稿を閉じるべきかもしれないが、

もう一つ言わでものことながら思うところがあり、稿を続けることとした。

本稿冒頭に示した15の解釈について、解説に、
夢にも会えない嘆きを歌った歌。相手をなじる気持ちも含まれている。(15。二六〇頁)

と述べているところから、こうした「なじる」含意を、「どうして」と表現したのではないかと思ったのである。

再掲になるが、2と7が、『古今和歌集』五五二番歌と絡めて、五五九番歌の係助詞「や」の持つ含意について、

「や」は五五二の「や」と同様だが、このほうが相手を問いつめる意が強い。(2、二三八頁。7、二二三頁)を問いつめる意が強い。(2、二三八頁。7、二二三頁)と解説しており、また案内に暗い話題であるが、「どうして」などの原因・理由を疑う疑問副詞句については、原因・理由を疑う用法の他に、問いかけの形式で相手を難詰する用法があるように思う。

資料としての適不適は知らないが、たまたま見ていた吉川英治『三国志』(本文は吉川英治『吉川英治歴史時代文庫 33 三国志(一)』(講談社、平成元年四月)を使用した。

以下の例、傍線は引用者)により例を示すと、

原因・理由の疑問の例

「何を仰るんです。おつ母さん！ どうしてそんなことを」

母の心を酌みかねて、劉備がおろおろというのと、(八六頁)

難話の例

「おつ母さん！ ……おつ母さん！ ……一体、なにがお気にさわったのですか。なんで折角の茶を、河へ捨てておしまいになったんですか」(八七頁)

後者は後続の文に「母は、歓びの余りに、気が狂れたのではあるまいか？」(八七頁)とまで言っており、非難の気持ちが含まれ、ただの疑問とは思われないものである。

五五九番歌の疑問に含まれる難話のような語感、一文に漂う気配を写すのに、「どうして」を使う運用中にはあるのではないかというのが、筆者の思うところである。

七、おわりに

『古今和歌集』五五九番歌の助動詞「らむ」についての筆者の解釈は如何というに、ごくありふれた現在推量である。

そこから「どうして」はどうして補われているのだろうかという疑問を持ち、本稿を起こした。

本稿を起こしながら、6や8の書きぶり、21の

当時、人が自分に思いを寄せていれば、その人は夢に現れるという俗信があった。「夢の通ひ路人目避く」とは、「人が、夢の中で自分に通ってくる道で、人目を気にして通って来ない」という意味。これを、「きつと今頃、人目を避けて通って来ないだろう」と現在推量で解釈するか、「どうしてあの人は、人目を避けて通って来ないのだろう」と原因推量で解釈するか。後者であらう。(五二頁・五三頁)

口吻などを見て、この疑問副詞句を補う解釈法は、世間では相当おらかな運用に任されているように感じた。

本稿により、筆者がいかにこの語法を窮屈に捉えているか、示すことが出来たと思う。

そして、『古今和歌集』五五九番歌の助動詞「らむ」に対する疑問副詞句を補う解釈を、本稿に述べたような大層な説明が必要ではあるが、これはこれでたいへんよい解釈であると、筆者は考えている。

【注】 引用文は漢字の字体を改めたものがある。傍点傍線などの効果は、文中断らない限り、底本ママ。

【初校時追補】

竹岡正夫『古今和歌集全評釈（下）』（右文書院、昭和五年一月）は投稿時参照することを得なかったものの一つだが、五五九番歌の助動詞「らむ」について次の記述がある。

末尾の「らむ」は、上述の事象をすべて推察して述べている意のもの。あの人は、夜までも、夢の通い路で人目を避けているんだらうか、——こんなにちつとも夢の中に来てくれないのは、という意。『金子評釈』などのごとく「どうして」「なぜ」のごときを補う「らむ」ではない。上の「よるさへや」（『窪田評釈』）が「感歎」の意の「や」とするのは誤に呼応している。（一四二頁）

「四」で述べたような係助詞「や」の解釈を否定しざるものなので報告しておく。竹岡氏の訳出は以下のとおり。

住の江の岸にひたひたと寄る波——その夜さえ、あの人
人は夢の中の通い路で人目を避けているのであろう

か。（一四二頁）。

『百人一首』の解説書は浜の真砂か犬の糞ほどあるが、疑問副詞句を補う解釈を示した管見では早期の文献が投稿後少し入手したものであったので報告しておく。橋本武『解説 百人一首』（日栄社、昭和四九年一月）である。

住の江の岸に波がよる——それと同じことばの〈夜〉にまでも、夜見る夢の中の通い路の逢瀬おせに、あなたはなんだつて人目を避けようとするのですか。もつと大胆になつたつていいじゃありませんか。（四四頁）

星瑞穂「百人一首を味わう【三〇】住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ時人めよくらむ」（『日本語学』第三七卷第一号、平成三〇年一月）を得た。国立公文書館調査員の仕事は楽しそうであった。

松田武夫「和歌鑑賞「すみの江の岸による波よるさへや」」（『解釈』一九卷一二号、昭和四八年二月）を知ったが COVID-19 の蔓延により閲読の機会を得ていない。